＜実践発表＞　宮崎県立都城さくら聴覚支援学校

日本語を身に付け、自分の意思を表現できるようになるために
～新聞を用いた実践～

発表者　教諭　佐藤　綾

１　はじめに

（１）学校の概要

本校は、聴覚支援を要する幼児児童生徒を対象とする特別支援学校で、幼稚部から高等部まで 38 名が在籍している。1927 年、歯科医師であった冨田保助氏が「都城市聾話学院」として創立し、2027 年９月１日には 100 周年を迎える歴史ある学校である。宮崎県内には、聴覚支援学校が本校と延岡しろやま支援学校聴覚障がい教育部門（幼・小・中学部のみ）の２校があり、出身地は県内全域、一部県外となっているため、平日は寄宿舎を利用して学校生活を送る児童生徒も多い。

（２）学校の目指す子どもたちの姿

本校は、将来的には自立し、積極的に社会参加できる力の育成を目指している。その具現化のための幼児児童生徒像として、「心豊かで健康な人＝心身の健康」「進んで学ぶ人＝学力・向上心」「働く喜びをもつ人＝自立」を掲げている。「聴覚」という感覚器官に関する障がいがある子ども達の情報取得手段として「見て聴く」「見て分かる」習慣を身に付けることを土台として、「言語力・コミュニケーション力の向上」「一貫したキャリア教育」を重視している。言葉という道具を使って意思の伝達や思考する経験を積み重ねたり、異年齢の集団で互いに学び合える環境を適宜設定したりしている。

（３）学校におけるこれまでのＮＩＥ活動

新聞には写真など、子ども達にとって身近で興味を引く情報が豊富に掲載されている。新聞を好きになる、興味を持つことを入口として、文章内容の理解や記述、世の中の動きを知る、さらには自ら調べるという積極的な行動につなげていけるものである。また、聴覚に障がいがある子ども達が新聞や教科書などに使用される書き言葉（書記日本語）を理解するためには、手話と日本語との概念を一致させるとともに、音韻や助詞、活用などの基本的文法や漢字の読み書きを段階的に身に付ける必要がある。子ども達にとっての言葉とは、手話・日本語を指しており、手話と書記日本語では文法体系が異なるためである。

ＮＩＥ活動については、これまでも発達段階に応じて各学部（幼・小・中・高）で取り組んでいたが、全職員で共有する機会は設定していなかった。そこで今回、

大会での発表を機に寄宿舎を含めた全校の実践内容をまとめ、整理することとした。

2　実践の内容

（１）基礎・基本的内容（言語事項）

ア　幼稚部：合同学習おあつまり会にて、グループに分かれて新聞に触れる。

３歳児学級（ぱんだ組）・４歳児学級（うさぎ組）は、新聞から動物の写真を探して担任に知らせ、名称を言葉（手話・日本語）で確認し、はさみで切り取り、模造紙に貼った。５歳児学級（きりん組）は、新聞から気がついたことを話し合ったり、教師の解説を聞いたりした。

イ　小学部：新聞記事を視写する・要約する。

第３学年以上は、朝日小学生新聞「天声子ども語」を視写した。学年に応じたねらいに基づいた実践も行った。その中でも第４学年では、意味の分からない言葉を３つ探して国語辞典で調べる学習や、教科書の単元で要約の定義・注意点を学習したことを活かして記事を要約する学習を取り入れた。

ウ　中学部：新聞記事から文の型・助詞を探す・要約する・言葉を調べる。

５つの記事の中から５種類の文の型に一致するものを探し、それぞれ型に応じて要約した。場所の助詞「に」「で」「を」の意味を理解した上で記事から見つけた。朝・帰りの会で時事ニュースについて考える機会を設定したり、記事内の分からない言葉をタブレットで調べて手話と一致させ、ワークシートに書き込み、印刷して掲示したりした。

エ　高等部：新聞記事内容を把握する・記述する・考察する。

生徒自身が興味を持った記事を選び、５Ｗ１Ｈに沿って概要を把握した。記事内容に関しての感想を記述した。その際は、テーマから離れないように気をつけながら行った。また、他の事項と関連付けて考察した。

オ　寄宿舎：隠された新聞記事の一部を探し、正確に視写する。

四コマ漫画、芸能人・スポーツ・天体・地域のトピックや特産品の記事、美術作品の題名など、児童・生徒の興味を引く題材を選定して行った。

（２）発展的内容（関連付けた内容）

ア　幼稚部―基礎・基本的内容に発展的内容も含む。

イ　小学部

（ア）　新聞記事を紹介する・掲示する。

朝・帰りの会や授業中において、時事への関心を促すために、旬のニュースやオリンピック等の一大イベントについて教師が積極的に紹介した。過去の災害等の当時の新聞を掲示し、当時のことを知らせたり、考えさせたりした。また、教室内に時事問題コーナーを作り、該当学年学習内容と関連付けたり、言葉の説明を詳細に確認したりした。

（イ）　各教科において活用する。

a　国語

新聞を題材にした単元において、気になる記事を切り取って考えを記述する学習や関心のある環境問題について調べてまとめる学習を行った。

ウ　中学部

（ア）　新聞記事を紹介する・掲示する。

朝・帰りの会において、ルビを振った記事を提示し概要を解説した上で、３つ程度の言葉の読み方、手話の確認を行った。新聞を廊下のラック（使用済み封筒で作成）に入れたり教室内に掲示したりして、常時目に触れることができる環境を整えた。

（イ）　各教科等において活用する。

a　理科

新聞の月の絵を切り抜き、月の満ち欠けの周期を調べた。変化が分かるように順番に並べて貼った。

b　社会

授業内容に関連する記事の「見出しの言葉」に着目し、手話や意味の確認を行った。授業での学習後、手話ニュース映像を見ながら内容を把握し、最後に記事を読んで確認し、学習内容と現実を関連付けた。

c　総合的な学習の時間

ＳＤＧｓをテーマに取り組んだ文化祭発表・リサイクル活動に関連する記事を紹介し、ＳＤＧｓとの関連について思考する機会を設けた。

エ　高等部

（ア）　新聞記事を紹介する・掲示する。

「しかく新聞」（聴覚障害関連のニュースを集めたネット新聞）の視聴を促した。常に新しい情報に触れられるように、様々な新聞（読売・産経のＮＩＥワークシート）を掲示したり、先輩や同級生の活躍に関する記事を選択して掲示したりした。

（イ）　各教科において活用する。

a　国語

記事を読み、「賛成・反対」の立場を明確にし、理由を記述した。内容についてさらに深く知りたい時は、調べたことを箇条書きにして記す、記事を要約するなどの発展的な活動を行った。

b　英語

気になる記事を選択し、要約して英語に直した。→感想や意見を英語で書いた。→英字オリジナル新聞を作成した。

c　家庭科

単元「高齢者と関わる」において、実態把握のために宮崎県の超高齢化社会の記事、市町村別表を活用した。記事を読み、各種詐欺被害について、教科書等の手口よりも巧妙化し被害に遭っている実態を理解した。

オ　寄宿舎：新聞記事を紹介する・掲示する。

「聴能ニュース」として児童・生徒に関連がある内容の記事を常時掲示している。

3　成果と課題

（１）成果

○　動物の写真に興味を持ち、集中して探すことができた。写真を見て弓に興味を持ったり、該当場所を教師と一緒に地図から探したりすることができた。「日本から遠いところに住んでるね」「学校がないの？」などの感想を述べることができた。（幼）

○　新聞や時事ニュースに対しての興味・関心が高まり、自ら子ども新聞を手に取ったり、「○○ニュースを見た！」という報告をしたりする児童が増えてきた。（小）

○　新聞記事に常に触れることで社会の動きに興味を持ったり、関連付けて考えたりする機会が増えた。学習した日本語の組み立て（主語・述語の関係等）が新聞記事の中にあることに気付き、内容と文の型の両方に興味を示すようになった。（中）

○　新聞に触れる機会を増やしたことで、視野を広げることができた。また、既知の知識や経験と関連付けて意見を述べるように促したことで、内容に深みが感じられるようになった。（高）

○　取組の最初に職員アンケートをとることで、児童・生徒の現在の実態に応じた適切な題材を選定することができた。また、分からない言葉の意味を調べる生徒も出てきた。（寄）

このように、聴覚障がいがある子ども達にとっての新聞活用方法を共通理解することができた。また、学校全体の実践内容をまとめたことで、共通項や系統性があることに気付くことができた。

（２）課題

○　「新聞は面白いもの」だと幼児に気付いてもらえるような活動が継続して必要だと感じた。漢字やカタカナなどを読めない幼児向けに、読み仮名や指文字で書かれている新聞記事があるともっと興味を持てるのではないかと感じた。（幼）

○　児童の新聞への興味の有無に個人差があるので、関心を引き出す提示の仕方の工夫を継続していく。（小）

○　新聞記事を読むことで現れてきた、自ら調べて語彙力を増やす姿勢を、様々な場面において活かしていくことができるように働きかける必要がある。（中）

○　記事の概要を捉えることができるようになってきているので、詳細を理解するための語彙力をさらに高めていく。また、既知の知識や経験と横断的に関連付けたり、類比や対比を使って考察したりする練習を重ねていき、実生活に活かしていく。（高）

○　生活の場である寄宿舎で新聞を読むことを学校において呼びかけるなど、連携をとって児童・生徒の興味の幅をさらに広げていけるとよい。（寄）

子ども達の成長の様子や活動内容について、今後家庭と連携して共通理解していくことが必要だと感じた。また、学校全体で互いのＮＩＥ活動を共有する場を設けるなど、継続していくための工夫を考えていきたい。